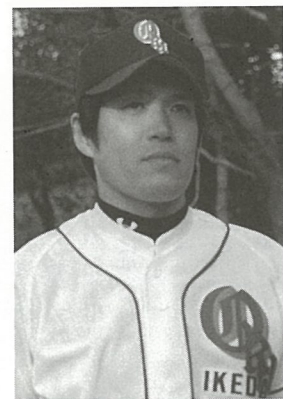


ケース打撃では、打者だけではなくサインを出すのも選手がローテーションで練習中も各メニューの前後に、選手同士で「目的」や「根拠」や「手段」を確認し合う。ネット裏から遠巻きに眺める森田先生が入り込んだり、口をはさむことはない

背番号1、植田圭主将



森田祐介【監督】

もりた・ゆうすけ ●1982年生まれ、兵庫県出身。豊中イーグルスで野球を始め、豊中四中で大阪府3位、高校、大体大でも外野手で活躍、社会人クラブ・大阪ウィングで3年間プレーした後、兵庫県で教諭に。川西市立緑台中を経て、多田中で念願の野球部顧問となり、人事交流制度で2012年に大阪府の国立・大教大池田中へ。担当教科は保健体育。

全体練習の大半は、ケースを設定しての攻防とスキル習得に費や

な右肩上がりの、無名の時代が確かにあった。

「まだ何かバツがほしい」と、満足しない森田先生。「わからないところもまだまだあるので、みんなで一つずつ潰していきたいと思います。大阪制覇も夢ではなく、実現できるところまで近づけています」と植田主将は胸を張る。

中学軟式球界に新たな基軸が西の都から生まれようとしている。2014年の夏に全国の頂点に立った北の超進学校にも、同じような右肩上がりの、無名の時代が確かにあった。

「直で教えるほうがよほど楽ですし、ジレンマも感じない。でも、フィールドから離れて初めて見えた部分も多々。選手同士で根拠をもって動くと、精度が高いんですよ」(森田監督)

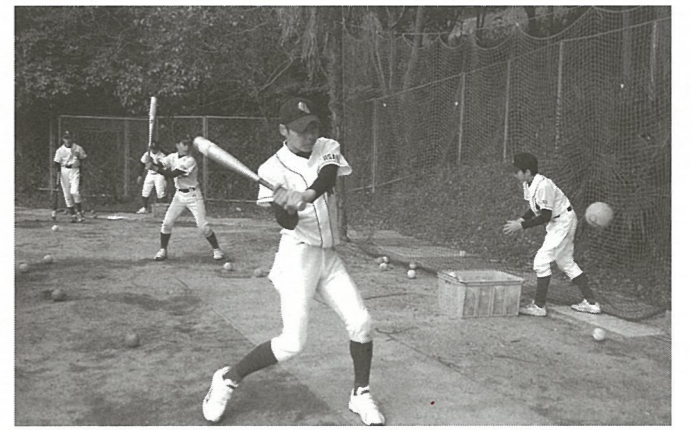
えるはずもなかった。主将の植田句がこう回想する。

「トップダウンのときから場所も時間も限られていて、効率を求め練習をしていました。でも「もっとうしろに歩いた方がいい」という意見が個々にあったみたいで、ボトムアップになってそれを出し合えて、実際に練習が変わっていききました。疑問や意見をみんなに投げることで僕自身、新たな考え

1年間の主なスケジュール							
11月~2月	10月	9月	8月	7月	5月・6月	4月	3月
・オープン戦 ・練習/トレーニング	・秋季高槻・島本選手権大会(ローカル大会) ●15年優勝	◆新人戦府大会 ※各地区4強によるトーナメント戦 ●15年2回戦進出	◆近畿大会(全中予選) ・新チーム始動 ・3年生引退試合	◆中学校総合体育大会(全中予選) ※大阪府の夏の総体はまず、全加盟校を南部・北部に大別してトーナメント戦。その各ベスト32の計64校による巨大トーナメント戦で優勝。準優勝(近畿大会出場枠2)を決する	・オープン戦	◆春季府大会 ●13年出場	◆春季高槻・島本選手権大会(ローカル大会) ●13年3位 ◆春季三島地区大会(府大会予選) ●13年3位



三塁手の迫田周大は再三の好守で、昨秋からの快進撃を支えている



校庭の隅に森田先生がネットを張ったことで、いつでも個人練習が可能に。手前で打つ副主将の村上大は、選手たちで決めた「三番・捕手」のポジションで存分に役割を全うしている

平たく言えば、すべてを選手たちで考えて実行し、積み上げていくこと。およそ10年前、週2日の練習で全国優勝を遂げた、広島県の高校サッカー部顧問が実践した内容に起因している。

そのDVDも購入し、選手たちと観ながら森田先生は口説いた。「完全コピーじゃなくて、附中バ1ジョンのボトムアップを確立させないか!」

やれ、声が出ていないだの、ダメだの、さんざん怒声も轟かせてきた指揮官の急変と唐突な提案。選手たちが面喰らうのも無理はなかった。

「最初は「なんで?」という感じでした(笑)」(村上大・副主将)。

また森田監督自身、「大阪制覇」を口にしたときに微かに起こった嘲笑を忘れていない。

制服で練習していた昔日

関西では「超」のつく国立の進学校として有名。キャンパスは系列の附属小学校、附属高校とともに大阪北部の閑静な地域にあり、さりげなくも英知や気品を来訪者に訴えてくる。

中学の野球部が校庭を使えるのは土日を含めて週に3日。部員は塾通いなど勉強優先で、平日練習で全員がそろうことはない。またその半分は入部するまでは野球素人で、経験者も小6の1年間は受験勉強に費やし、白球にほぼ触れていないという。当然、勝てないが、保護者からクレームがくるようなことはありえない。

そんな系列校の出身でもない森田先生が、教員の人事交流制度で兵庫県からやってきたのは4年前。当時は制服で練習する姿もあったらしいが、校庭の隅にネットを張ることから着手。ダイヤモンドが使えなくても練習ができる環境を整え、保護者たちも納得して全国の強豪校との遠征試合を定期的

に組み入れた。当然、選手の無責任な態度やい加減なプレーに対しては容赦しなかった。

ある意味、今でも、異端に違いない森田先生は、ようやく根付いてきたボトムアップの正負をしみじみと語る。「直で教えたり叱ったりするほうがよほど楽です、ジレンマも感じない。でも、フィールドから離れてみて初めて見えてきた部分も多いんですよ」

たとえば、盗塁のスタート。指揮官がサインを出すよりも、ノーサインのほうが圧倒的に速いことを知ったという。「ベンチの監督と、フィールドの選手が同じ脳ミソで野球をすることはできない。選手同士で根拠をもって動くと、精度も上がるんです」(同先生)

野球脳で上回る指揮官として、見て感じたことはノートに書き留め、選手ミーティングの具に使用してもらっている。また、向学心をくすぐるかのよう、野球ネタに限定した雑問やテーマを選手個々の調べ学習に加えている。

背番号も自分たちで

もともとの環境や性分も、すべてがマイナスイメージではない。おおらかに素直に育ってきた子どもたちは、自由と責任をはき違